

Title	初期アジア主義についての史的考察(2)第一章 曾根俊虎と振亜社
Author(s)	狭間, 直樹
Citation	東亜 (2001), 411: 88-98
Issue Date	2001-09
URL	http://hdl.handle.net/2433/122327
Right	© 2001 霞山会
Type	Journal Article
Textversion	publisher

第一章 曾根俊虎と振亜社

狭 間 直 樹

(京都大学名誉教授)

いま、曾根俊虎の名を知っている人はきわめて少ないだろう。知っている人も、孫文と宮崎滔天との間を取り持った人物として知っているのが、ほとんどだと思う。孫文の自伝「志あらばついに成る」では、こう言っている。一八九五年の惠州蜂起に失敗し、日本に亡命してきた孫文がハワイへ去ったあと、日本に残った同志の陳少白が曾根俊虎の紹介で滔天の兄の宮崎弥蔵を知り、そして滔天宮崎弥蔵との交友に進んだ、と述べている。

弥蔵は寅蔵のすぐ上の兄、日本を革命するためには隣の清国から着手すべきだとの「支那革命主義」を構想し、滔天をその主義によって感化したのである。かれらはそのために中国の革命家との接触を求めたのだが、曾根によってその願

が叶えられることになった。曾根は西南戦争で西郷軍側にいて戦死した滔天の兄、宮崎八郎の友人だったから、宿縁があったとも言えるわけだ。

滔天が曾根に出会ったのは、明治三十年の五月ころのことだから、話はかなり後のことになる。そのときの曾根を、滔天は「この人年齒五十左右、短髪(ことごとく)白く、軀幹短小なれど軽敏の風あり」、「いと嬉しげに往事を語り、また現勢を談じた」と描いている。初期アジア主義の立て役者の一人が、孫文と滔天を結びつける役割を演じたことは、やはり特筆されてよい一つのエピソードと言ってよいだろう。

曾根俊虎、号は嘯雲。東北の雄藩、米沢藩の儒者曾根敬一

郎の子として、弘化四(一八四七)年に生まれた。少年時代に藩校興譲館で漢学を学び、英才の誉れが高かった。藩校では、のちに大官暗殺陰謀事件で明治新政府によって処刑されることになる雲井龍雄の感化をうけている。徳川幕府を崩壊に導いた戊辰戦争(一八六八)で父を失ったあと、米沢で渡辺洪基に英学を学び、さらに江戸に出て吉田賢輔に洋学を学んだ。幕末の激動期に少年期を過ごし、成年に達したあとは維新後の新社会になっていたわけで、時代の変化をまともに受け止めて、新旧両時代の教養を身につけた「時代の子」だったのである。

雲井龍雄は、戊辰戦争のさいに奥羽列藩同盟を画策した人物だが、明治三(一八七〇)年、大官暗殺陰謀事件の廉により処刑された。その直後に起こった、雲井処刑の責任者広沢真臣が暗殺された事件で、曾根は雲井のために報復をはかったとの嫌疑により逮捕された。しかし、勝海舟・副島種臣・西郷隆盛らの支援によって釈放され、翌四年、海軍に入っている。数え年、二十五歳の時のことだった。

以後、曾根俊虎は明治二十四(一八九一)年に病を得て退職するまで、二十年間を海軍の軍人として過ごした。その間、明治十三(一八八〇)年に興亜会を創立し、その方面の活動により、志士・浪人の「先達」として名を馳せた。海軍退職後、基本的に在野の人として過ごすことになるのだが、かつ

での履歴からしてほとんどの「愛国団体」に関係していたという。晩年、長崎―東京間を往来、諸種の「海外企業」に従事したが、いずれも振るわなかったらしい。明治四十三(一九一〇)年五月三十一日、東京の仮寓にて没した。

つまり、曾根俊虎の生涯は、幕末から維新初に漢学と英学を身につけた知識人が、明治政府のもとでその前半二十年を海軍軍人として、後半二十年を在野の名士として過ごした生涯だった。米沢藩の出自というだけでも不利な条件だったうえに、広沢事件に連累投獄のハンディを負ったの出発点から、その生涯になんらかの陰影を感じとったとしても、思いつくことはないだろう。

ともあれ、明治五(一八七二)年六月、曾根俊虎は海軍少尉に任ぜられた。翌年三月、日清修好条規の批准書交換等の任務をおびた特命全權大使、外務卿副島種臣に従って、「判任随員」として清国へわたった。帰国後、海軍省の本省勤務となり、十二月に中尉に昇任した。この間はわずかに一年半だが、大尉昇任は五年半後の明治十二(一八七九)年七月のことである。それから十二年、大尉のままで退官したのでから、いわばノン・キャリア的に、軍人としての出世コースを外れた存在だった。非藩閥はおろか、米沢藩の出だったのだから、それも仕方なかったのだろう。

もうすこし詳しく見てみよう。副島全權大使の随員として

渡清したことは、おそらく東西の学殖に富む曾根俊虎の評価を高めたにちがいない。この行が「支那通」としての曾根俊虎を生んだのである。後述する外交官への転身の希望も、このときの経験が自信の裏打ちとなったであろう。

しかし、翌七年九月に台湾事件（台湾出兵）との関連で大陸派遣を命ぜられたときの任務は、軍需品調達と情報収集だった。これは陸軍側の謀報体制確立のうごきに応じたものであって、曾根は海軍側の情報活動の第一線の任務につかされたのである⁴⁴。この時の任務は八年十二月に終わって帰国したが、すぐ翌九年二月にまた渡清を命ぜられ、十一年一月までの二年間、大陸にあって情報収集等の任務にはげんだ。この功勞にたいし、曾根俊虎は帰国直後に天皇の謁見を受けている⁴⁵。当時、天皇はかなり頻繁に、多くの人士と謁見したとのことだが、この謁見が「対支問題」第一人者としての曾根の琴線に触れたことは確かだろう。

しかもそれと関連して、大陸での情報活動の所産である『清国近世乱誌』『諸砲台図』を献納して、褒辞をうけたという⁴⁶。後者は未見だが、題目からして兵要地誌そのものであることは自明である。前者は水準の高い太平天国史である。兵要地誌部分は別の報告書として提出され、別に歴史著作としての部分をこのような形で公刊したものなのだろう。同書は、一八七九年の刊だから、天京（南京）陥落からわずかに

十五年、太平天国についての著述としてはきわめて早い時期のものである。しかも、早いだけでなく、内容も確かなものだから、曾根の学識が伺えるものなのである。

なお、日本についての情報収集を日本側がかなり援助したことは、『日本地理兵要』の著者姚文棟の『日本国志』「凡例」に記されている⁴⁷。「参訂姓氏」として挙げられたなかに、北沢正誠・小牧昌業・岡本監輔・岡千仞らの名前が見えるが、かれらは皆、のちに興亜会や亜細亞協会の重要メンバーとして登場してくるだろう。

曾根の書物が当時に抜きん出ているのは、まず「万国公法」の立場にたつことを明言していることである（それが中国の内乱利用の観点と即応するものであることは後述）。つまり、太平天国は「官」に相対する「敵」なのであって、「賊」なのではない。ゆえに、一方で反乱の首魁洪秀全を英雄とし、かつ反乱討伐の殊勲者曾国藩の偉功を同時に顕彰することができるのである。反乱の発端が清朝の政治の腐敗にありとする視点は揺るぐことなく、しかも「敵」軍の翼王石達開の敗死の場面でとくに論贊をかかげて、その「大志」「仁義」を称揚し、「官」軍の李鴻章の勝利を描いてその道義的違約を責めているのを見れば、曾根の執筆意図が、太平天国の失敗を惜しむと言えは過当になるにしても、清朝政治の改革の必要を訴えることにあることは疑えないのである⁴⁸。

話がすこし横道に逸れてしまったが、ここでは、一国の政治は民の安定した生活を保証することに責任を負うものでなければならぬとする儒学の基本的教義に、曾根俊虎が立っていたことを確認しておけばよい。興亜イデオロギーはそれと表裏の関係にあるものである。『清国近世乱誌』での「乱」の位置づけ、「大志」「仁義」の評価はそれを物語るし、しかもそれに加えて「万国公法」の視点でもって叙述しているのである。

この立場から欧米の侵略に虐げられるアジアの構図を認識にのぼすとき、百尺竿頭一步を進めて、まっとうなアジア主義、興亜のための連携のイデオロギーへと向かうであろうことは、ごく自然に予想されてよい一つの理路であろう。ほかにそのような理路をたどったものがいくらかもいたはずだが、振亜社の形をとってそれを組織化することに着手したのは、まじうかたなく、曾根俊虎の功績である。

曾根俊虎による振亜社の設立を、草間時福⁴⁹は「明治十年春」としており、それに従う記述も見受けられるが、曾根の海外勤務期間から推せば、恐らくは明治十一年春以降⁵⁰であろう。振亜社の趣旨としては、諸国が協力して衰微したアジアを振興するという以外、草間の演説も触れるところはない。具体的な仕事として、「支那語学」を教授する学校の設立について、曾根が金子弥兵衛に相談した云々、と草間はいう。

しかし、金子が在北京の公使館勤務から帰国するのが明治十三年一月のこと⁵¹だから、該校の設立は後述する同年二月の興亜会付属学校のはずである。

つまり、振亜社の内実ほとんど分かっていないのである。ということとは、実は語るに値するような内実はなかったのではないかと推測される。そこで注意を引かれるのが、ほぼ同時に、大久保利通と何如璋の間で話し合われた計画である。その計画上の組織を「振亜会」と呼んだのは、後の『対支回顧録』だが、黒木彬文氏がすでに指摘されたように、それ以前の文献にその名は見えない⁵²。

その計画を実現すべく、両者の間で実際に話し合いが行われたことは、興亜会第一回会議での宮島誠一郎の演説に明らかであるのみならず、大久保の相手側である何如璋の発言（即曾根俊虎との談話記録）からも証明される⁵³。その具体的な措置は、双方とも、教師四名・生徒六十名規模の、相手国の言葉をまなぶ学校をつくることだった。何如璋の言を借りれば、「敵国より少年数十名を選び、貴地に留め、亦貴国選挙の少年を敵国に送り、互に国語を学び、各両国の情実を知らしめ、後來両国政府をして益々交訂親密に至らしめば、上の為すところ下自ら之れに倣い、上下相親交すること膠漆の如く、緩急相扶け以て外侮を禦がんことを約せしに、隣れむべし、不幸にして没し玉へり」。

この計画は、大久保暗殺により、緒に就くことなく頓挫した。何如璋公使の着任が明治十年十二月、大久保暗殺が翌年五月だから、計画について両者が話し合えた時期はきわめて限定される。この計画が曾根となんら関係するものでなかったことは、上引の「談話」での、何公使と曾根の応答に明らかである。大久保の下で実際に計画案をつくった宮島が、のちに曾根の興亜会にくわわって、同種の興亜会の学校がつくられたために、大久保II宮島ラインの計画と曾根たち振亜社のあいまいな「実体」との混同がおこったのだらう。なお、宮島誠一郎は曾根の同郷、米沢藩の出で、中国語教育に大きな足跡を残したことは、比較的よく知られている。

振亜社の後身が興亜会であることは、前引の興亜会創立大会での草間時福の演説に明言されている。そこではいつ創立されたかに触れないが、創立の時期に言及しているのは、亜細亜協会懇親会での北沢正誠の演説⁴⁶で、それによれば、振亜社は明治十(一八七七)年春の創立、「亞洲諸国の衰弱を振起し、之を往昔の隆盛に挽き回さんとす」趣旨のものであったという。発起者は曾根のほか、東次郎・前田謙吉で、ともに、朝鮮・清国問題に関心をもち、海軍とかかわりのある人物だった。

曾根俊虎が振亜社のようなアジア主義団体を組織しようと考えてるにいたった時期を確定するにあたり、黒木彬文氏は曾

根の「興亜管見」なる一文を重視される。それは明治七年十二月の西湖行について記した「清国漫遊誌」なる日誌に見えるもので、浄慈寺の吾哲師から太平天国の檄文をもらったお札に贈った書冊、として記されている。その「興亜管見」では、アジアの国々が西洋の圧迫に苦しめられていること、たにする断腸の思いが吐露され、挽回の策を以下のように記している⁴⁷。

近ごろ、興亜の一会を開くことを信え、須へからく中・東(清国・日本。狭間注、以下、引用文中の「」はみな同じ)兩國に在りて先ず為めに同心協力し、興亡相輔くべきを擬す。然る後、亞洲諸邦に推し及ぼして共に相い奮勉し、能く自強独立せしむれば、終に會稽(の恥)を雪ぐ可きに庶し。……敢えて興亜管見一冊を呈し、敬しんで表情を表す。幸いに仏電を垂れられよ。

これは確かに次回にのべる興亜会宗旨の核心部分に通底する考えである。曾根が振亜社を創立する以前に一定の興亜イデオロギーをもつにいたっていたことは、十分に肯定されてよい。しかし、「興亜管見」が明治七(一八七四)年にすでに出来上がっていたと断定することには、いささか慎重でありたい。というのは、「清国漫遊誌」が活字になったのは『興亜会報告』第二十一―二十四集、すなわち興亜会成立後一年半ほど後のことだからであって、いささか平仄の合います

き、の感なきにしもあらずなのである。「興亜管見一冊」をお礼にした吾哲師惠贈の「太平天国檄文」は「漫遊誌」で六頁余を用いて紹介しているほどの重要文書であるのに、『清国近世乱誌』に用いられた形跡を見いだすがたいことも、疑問を強めさせる。もちろん、全てを否定するつもりはなく、のちに興亜会の創立に結実するアジア主義の思想的萌芽といったものを、すでに抱いていたことは肯なわれてよいだろう。

それについても、注意を引かれるのは、「漫遊誌」を掲載するにあたっての「前言」である。そこでは、軍人としての用務に言及することなく、その一文の精神背景について前置きして、このように言う。

余武職に在りて性質微弱、故に行伍を厭ふ、明治甲戌の歲(一八七四)、清国に漫遊し、吾友柳園子とともに、揚州の月に吟じ、西湖の海を探り、路に騷人墨客を訪ひ、互に雅懷を伸べ、自ら赤松子に従へりと思ふを得たりしは、天幸と謂ふ可し。

柳園子、町田実一との西湖漫遊は風流の行であり、赤松子の流れを汲んだ神仙の遊だという。つまり、「漫遊誌」は軍事探偵の面をおさえて文人の神経で書かれているのだが、その延長線上に興亜会の組織がつけられるのである。

方今亞洲の中、其の独立を得たる者は、僅に日清二國有る而已。況や同文同種、唇齒の誼、當きに一家と視るべ

きに於てをや。而るに我が兩國、向來主權を重んぜず、欧米の陵辱を受けたれば、尤も當きに協力恢復すべきに、何ぞ一家庭の小嫌隙を忍びず、以て大謀を乱すや。詩「小雅、鹿鳴之什、常棣」に曰く、兄弟牆に聞けども、外其の侮りを禦ぐ、と。豈に徒言ならん哉。是に于いて姑く我が耳を洗はんと欲し、竟に西湖の行あり。

つまり、この漫遊は、日清兩國のあるべき姿を求めようとの、決意を秘めてなされた「行」なのだ。曾根は海軍軍人としての任務遂行と平行して、みずからの興亜思想を形成していったのだが、それを興亜会成立の一年半ばかりのうちに、「漫遊誌」を公表するにあたっての「前言」でこのように表白したのである。

興亜会創立後、曾根はすぐにまた大陸に派遣される。この度の出発は明治十三(一八八〇)年四月五日、帰国は同年十一月八日、上海・福州・広東方面への派遣である。その後、壬午事変(一八八二)、甲申事変(一八八四)さらには清仏戦争と、情報収集の必要のたびに大陸に派遣されているようだが、明治十七年八月には福州事件との関連で上海から福州へ派遣されている。福州事件とは、清仏戦争に乗じて陸軍の小沢豁郎らが福州において哥老会を利用しての蜂起を画策したもので、そこでの曾根の具体的な役割ははっきりしない⁴⁸。以後、曾根が大陸に派遣されることはなかったようだが、こ

れを承けて曾根は外交官への転身を伊藤博文に願ひ出るのである。

すなわち、明治十九（一八八六）年五月と九月の手紙¹⁸がそれで、五月の「陳情書」と題する手紙のなかで曾根は、こう言っている。

欧米行きの出世コースをすてて清国の仕事に専心したのは、「興亜の大目的」を持てばこそであった。その大目的は二つである。第一は、清国の衰運にさいし、「草莽悲歌不平の徒」の反乱が起ればそれを利用して「本邦の爲めに偉業を企て、以て後来の基礎を固ふし、竟に興亜の大目的を達せんこと」。第二は、もし清国が日本同様に革新されれば、「交際を親密にして艱難相救ひ……亞洲連合の策を定め以て欧米各国の輕侮を防ぎ、竟に興亜の大目的を達せんこと」である。

第一の大目的は、これだけを見るなら、侵略主義の嫌いだないではない。おそらく、当時の志士の大陸にたいする思い入れの、かなりの部分はこのような意味合いを持つものだったろう。「万国公法」の視点で太平天国の反乱を分析したのも、この大目的に相応するものだったはずである。しかし、曾根の求めたものが清国の改革と発展だったことは、すぐあとに、この偉業の達成のためには、清国の「人民の信用と志士的一致」が根底だ、と言っていることから明らかだろう。

清仏戦争後における清国の進歩はめざましく、今は平和的

はへつらつての清国人蔑視だから、「假鬼子」である。これには、右側に「キヤグイツー」と中国音で、左側には「ニセヲニゴ」と日本音で、丁寧に二種のルビがふられている。暴力事件の真因はこの誤まれる蔑視に根ざしているので、このようであるかぎり、たとえば朝鮮問題で日本が独立保護の正しい政策を採っても満清官民は信ぜず、新聞は「朝鮮を併呑して満州を窺」おうとしていると書きたてる。これでは「良友」になりようがない、と真つ当な苦言を呈している。上下ではなく対等の関係を、対清国はもちろん、対朝鮮にも求めていることは、きわめて明白だろう。

ここまでの分析と主張もなかなかのものだが、曾根はさらに一步をすすめ、かくも「和睦を失い相輕蔑する」にいたつた原因を、こう指弾する。

我政府は明治維新より近年に至る迄、清国に対するの処置（台湾琉球事件等）は彼を侮るの心なきも其形あるを免れず。「我」已に彼を侮れば彼も亦我を侮る。若し侮を得ざれば則ち怒り、且怨む。

台湾出兵と琉球処分等、日本政府が取ってきた政策がまさにそれだと忌憚がない。「侮るの心なきも」はたんなる修辭で、「其形あるを免れず」の現実を正視せよというのである。

これは現実に興亜会が直面した問題なのだが、こんなことは「嗚呼、積怨深怒何の日か泄れざらんや」。

な協力関係を強めるべきだ、と曾根は言う。つまり、第二の大目的を追求するべき時なのである。この状況把握から「外交際官」への転身を伊藤に「陳情」しているのである。もしそれがダメなら、「農商務に転任して日清間実地の商法を担当し、貿易を以て彼と輪贏を決し、誓て本邦の公益を興さん」ともいう。これもまた「興亜の大目的」を達せんがためというのは、実際にそのとおりであって、曾根は長い軍人生活の後、「交際」と「貿易」による興亜の大目的の達成を望んだのであった。

さらに、より根柢的なのは、日本の国益を追求するのは当然だが、その国益は相手との対等の関係において実現されねばならない、としていたことである。上引の「陳情書」の後、六月に長崎事件が発生する。清国海軍提督丁汝昌の率いる艦隊の水兵が長崎で暴力事件を引き起こしたのだが、曾根のその事件にたいする見方はたいそう興味深いものである。九月の伊藤博文宛の手紙（これは無題）で、こう言っている。

目下長崎事件の如きは素より小事なりと雖ども、亦故無くして起りし者には非ず。夫れ本邦人の清国人を見るは欧米人を見るときは大いに異なりて、之を牛豚視して輕蔑を加ふるを以て、清国人も亦本邦人を輕蔑して假鬼子と呼ぶに至りぬ。

日本人が差別するから、清国人もする。それも、欧米人に

台湾出兵にたいしては、上引の「漫遊誌」前言でもすでに、講和での五十万両の賠償金取得にたいし、自分の「意思と懸隔せること亦た甚し」と批判している。さきに「良友」の語をもちいていたが、将来にわたる両国間の良好な関係を築くことが主眼だったことは、容易に理解されよう。

九月付第二信でも、外交官への転身の配慮を惻々と伊藤に請うている。曾根がこれほどまで転身を願ったのは、海軍での仕事に嫌気がさしていたことはもちろんあったろう。信中にわざわざ、「探偵家の名有るにより領事に向かぬと云う者がある」云々と弁解しているのも、それを思わせる。

そこで、その「探偵家」の名あることによるマイナスを埋め合わせるべく持ち出すのが、自分は寧ろ「興亜家」として知られている、との売り込みだった。上海で興亜会の規則書三千部を配って多くの知友を持っていることが、その広がりや印象づけようとするものだったとしたら、李鴻章への上書にたいし李氏が天津海関道をしてわざわざ曾根に「参謝」せしめたことは、その深さを認識させようとするものだった。いずれも「外交際官」になるのにふさわしい前歴である。外交畑への転身が、年来の願望であった興亜の事業に取り組むことを可能にすることは言うまでもない。

しかも、かつて海軍の情報任務にともについた柳園子町田実一は、明治十六年秋に香港領事代理に任命されていた¹⁹。

また、曾根とともに振亜社を発起したとされる東次郎（南部次郎）も同じく明治十六年秋に芝罘領事代理心得になっていたのである。曾根が焦るのも当然だった。

しかし、伊藤博文は結局、曾根俊虎の求めに応えなかった。米転を望んだ曾根を待っていたのは、逆にまたも罪人として拘禁される運命だった。明治二十一年に筆禍事件により免官、またも拘禁の身となった。しかし、今度も無罪となった。これは、『法越交兵記』での当局非難の語が招いた事件だと言われてきたが、実は条約改正問題についての秘密出版に絡んでのものであることが、佐藤茂教氏により考証されている。それから二年あまりのちに病気を理由に退官したが、これは長州閥の海軍壟断、とりわけ対清武断政策採用にたいする抗議だった、と佐藤氏はいわれる。なお、筆禍の因は『法越交兵記』にありとするのは『対支回顧録』に発するものようだが、その誤りが意図的なものだったのかどうかは、未詳である。

海軍を去った後、曾根俊虎は落魄の晩年を送ったらしい。時は一九〇一年四月、東亜同文書院開院式に臨むべく、長崎にやって来た東亜同文会副会長長岡護美にたいして同行を願う出ているのだが、その時の様子はすなわち、「形容枯槁、鬚髯皆白の長髪は、洵に先覚の末路蕭条を極むとて、興亜会時代の同志たる子爵をして黯然たらしめた」というのである。

ある。このドラマチックな推理の可否を判断する力は私にはないが、副島・大久保そして伊藤との関係についての一つの解釈としては興味深いので、参考までにあげておく。なお、曾根の伝記面での記述は、この佐藤論文、黒木彬文「興亜会の成立」（『政治研究』第三十号、一九八三年）、東亜同文会内対支功労者伝記編纂会編『対支回顧録』下巻、同会、一九三六年、等によるが、特に問題にすべき場合をのぞき、典拠表示は省略する。

(4) 佐藤三郎「日清戦争以前における日中兩國の相互同情偵察について」『近代日中交渉史の研究』吉川弘文館、一九八四年、百四十頁。

(5) 佐藤茂教氏は、この謁見を重視し、以後、曾根俊虎は「明治政府への一切（の怨念）を忘れ去り、興亜家として立たんと決意した」と見る（『興亜会報告』と曾根俊虎「四百四十二頁」）。

(6) 『対支回顧録』下巻、二百九十九頁。ただし、回書は「支那近世乱誌」に改めている。「清国近世乱誌」の奥付では、「訳纂人 曾根俊虎」「明治十二年十一月十五日出版免許」とあり、巻頭に副島種臣の題字を付す。「訳纂」と自ら記すが、著作と「言」つてよいものである。

(7) 姚文棟「日本国志凡例」『読海外奇書室雑著』乙西（一八八五）序、五十葉表。

(8) 曾根俊虎「清国近世乱誌」日就社、一八七九年、「例言」・二百三十六頁・二百頁・二百四十四頁。

(9) 曾根嘘雲清国漫遊誌之続『興亜会報告』第二十二集、一八八一年十一月三十日、四十頁。

(10) 下引の伊藤博文宛「陳情書」にいう「大目的の第一」はあはるいはこれを指すのかもしれない。福州事件については、田中正俊「清仏戦争と日本人の中國觀」『思想』第五百十二号、一九六七年二月、参照。

(11) 『興亜会報告・亜細亞協会報告』第二巻、二百九十二・二百九十六頁。

(12) 吾妻兵治「送亜細亞協会員町田君子役香港叙」『亜細亞協会

海軍を去って十年ばかりも経ったころのことだが、その後、曾根はなお十年の余生を送って世を去った。

曾根俊虎の養女のタケ女史の語るところによれば、曾根俊虎は「豪放快活」な性格の人だったとのことである。たしかに、そうだったのだろう。また、没後に孫文が芝白金の興善寺にお参りにきてくれたこともあるという。養女がわざわざ話した孫文の墓参が、報いられることけっして多くなかった「興亜家」曾根俊虎にとって、もっとも冥利につきたことだったかもしれない。

注

(1) 近藤秀樹「志あらばついに成る」、小野川秀美編『世界の名著64 孫文・毛沢東』中央公論社、一九六九年、百九十三頁。

(2) 宮崎滔天著、島田虔次・近藤秀樹校注『三十三年の夢』岩波文庫、一九九三年、百六十五頁。

(3) 佐藤茂教「興亜会報告」と曾根俊虎——興亜会活動に見る曾根の一軌跡——、福地重孝先生還暦記念論文集刊行委員会編『近代日本形成過程の研究』雄山閣、一九七八年、四百四十頁。広沢事件への連累は、曾根が暗殺者を目撃したため、暗殺の首謀者、伊藤博文・木戸孝允・井上馨から採殺せられようとするところを、勝らに救われ、さらに大久保利通の支援を与えることになったのではないかというのが、佐藤氏の推理で

(9) 草間時福「興亜会成立の歴史」『興亜公報』第一輯、明治十三年三月十四日、四頁。以下、『興亜公報』第二集より『興亜会報告』と改題（『亜細亞協会報告』は、黒木彬文・鯉沢彰夫編『興亜会報告・亜細亞協会報告』不二出版、一九九三年、に拠るが、復刻版書名は略して、『X X報告』号数、刊行年月日（略することあり）、該号の頁数、を示すことにする。引用に際し、原文のカタカナは「ひらかな」に変え、句読・濁点等は適宜補った。また、漢文は基本的に訓読し、時に和訳したことをここで断りしておく。

(10) 佐藤茂教は明治十一年に大久保利通の肝煎りで興亜会の前身である振亜社を設立したという。（佐藤茂教「興亜会報告」と曾根俊虎「四百三十頁」）年次には賛成だが、大久保との関係は別である。

(11) 金子弥平（金子弥兵衛）『対支回顧録』下巻、二百四十二頁。

(12) 「大久保利通」『対支回顧録』下巻、百六十一頁、ただし、別に「振亜社」と記してもいる（同、上巻、六七四頁）。黒木彬文「興亜会の成立」八十六頁。

(13) 「宮島誠一郎演説」『興亜公報』第一輯、十五頁。「欽差大臣何公使と曾根氏の談話」『興亜会報告』第二集、三頁。

(14) 両者が別物であったことを、黒木氏はすでに指摘しておられる（『興亜会の成立』八十四頁）。

(15) 「紀野」『亜細亞協会報告』第五篇、一八八三年六月十六日、二頁。

報告』第十号、四十頁。町田の興亜思想については後述する。

(16) 『対支回顧録』下巻、百十頁。領事代理心得の年俸は銀二千六百円だったというから、待遇面での顧慮もあつたろう。

(17) 「公文備考」に記載せる曾根俊虎被告事件「史学」第四十三巻第三号、一九七五年。

(18) 『興亜会報告』と曾根俊虎「四百四十三頁」。

(19) 佐藤茂教「引田利章の経歴紹介と曾根俊虎に関する若干の史料」『三田史学』第四十五巻第一号、一九七二年、九十五頁。